近世東アジア儒教の光芒
—黄宗羲、朴趾源、横井小楠の比較研究

近世东亚儒教的光芒
——黄宗羲、朴趾源、横井小楠比较研究

陈毅立◎著

上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

近世東アジア儒教の光芒
—黄宗羲、朴趾源、横井小楠の比較研究

近世东亚儒教的光芒
——黄宗羲、朴趾源、横井小楠的比较研究

陈毅立◎著

上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

内 容 提 要

本书选取近世东亚中韩日三国的思想家黄宗羲、朴趾源、横井小楠为主要研究对象，并以儒教的经世济民、利用厚生精神为轴心，通过比较、对照的方法着重考察三人如何理解与接受东亚儒家先哲的学说和理论，同时深入探讨三人通过自身的理论构建与社会实践究竟欲向世人传递何种信息。在此基础上进一步清晰地勾勒出近世东亚思想世界的共通特征。

图书在版编目(CIP)数据

近世东亚儒教的光芒：黄宗羲、朴趾源、横井小楠比较研究：日文 / 陈毅立著. —上海：上海交通大学出版社，2015

ISBN 978-7-313-13357-1

Ⅰ.①近… Ⅱ.①陈… Ⅲ.①黄宗羲(1610～1695)-儒家-哲学思想-研究-日文②朴趾源(1737～1805)-儒家-哲学思想-研究-日文③横井小楠(1809～1869)-儒家-哲学思想-研究-日文 Ⅳ.①B249.35②B312③B313.3④B222.05

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2015)第 150510 号

近世东亚儒教的光芒——黄宗羲、朴趾源、横井小楠比较研究

著　　者：陈毅立
出版发行：上海交通大学出版社　　地　　址：上海市番禺路 951 号
邮政编码：200030　　电　　话：021-64071208
出 版 人：韩建民
印　　刷：虎彩印艺股份有限公司　　经　　销：全国新华书店
开　　本：710mm×1000mm　1/16　　印　　张：15.75
字　　数：315 千字
版　　次：2015 年 9 月第 1 版　　印　　次：2015 年 9 月第 1 次印刷
书　　号：ISBN 978-7-313-13357-1/B
定　　价：48.00 元

版权所有　侵权必究
告 读 者：如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系
联系电话：0769-85252189

前　言

日本近代启蒙思想家福泽谕吉在其著名的《福翁自传》中大声疾呼：一扫腐儒之儒说乃幼时之心愿。福泽之所以对儒教表现得如此深恶痛绝，至少基于以下两种因素：第一，福泽认为在儒教占绝对统治地位的社会中，人们往往缺乏自由论争的风尚；第二，在福泽眼中，儒教绝非实学，不仅无法卓有成效地促进社会的发展，反而还会阻碍社会的进步。

诚然，在武士阶级统治的日本社会中，儒教的历史意义与存在价值显然无法与科举之风大行其道的中国、韩国相提并论。然而，仅仅依此便欲淡化，甚至抹杀儒教对日本社会产生过的影响，难免有些违背实事求是之精神。关于这点，日本学者渡边浩明确地指出："在日本，儒教对于摄取西方式的近代发挥了先导作用。"(渡辺浩『東アジアの王権と思想』，東京大学出版会，1997 年，209 頁) 另一方面，诞生于中国的儒教在近世东亚广为流传，其本身也有力地证明了儒教为这一时期的东亚地区提供了某种共通的、有益的思想。

儒教学说中果真缺乏自由论争的风尚吗？中国台湾新儒家的代表人物徐复观的观点颇耐人寻味。概而言之，即在遭受专制统治歪曲、利用之前，真正的儒教其实与民主、自由有着异曲同工之妙，只不过没有选择从制度层面进行推广，而是寄希望于圣君贤相。如果孔孟二老能够转世于当今社会，想必他们一定会义无反顾地倡导自由和民主。

徐复观的见解颇具抛砖引玉之意。儒教究竟是不是福泽口诛笔伐的无用之学呢？如果答案是否定的，那么儒教的庐山真面目就亟待澄清和确认。

本书选取近世东亚中韩日三国的思想家黄宗羲、朴趾源、横井小楠为主要研究对象，并以儒教的经世济民、利用厚生精神为轴心，通过比较、对照的方法，着重考察三人如何理解与接受东亚儒家先哲的学说和理论，同时深入探讨三人通过自身的理论构建与社会实践究竟欲向世人传递何种信息。在此基础上，进一步清晰地勾勒出近世东亚思想世界的共通特征。

通过本书的研究，那些试图将儒教的经世济民精神与不断变化的时代课题相结合，并以此来拯救时局的近世东亚儒家知识分子的苦闷、抉择与挑

战便能鲜活地跃入眼帘。自由论争的风潮、尚贤举能的精神、以民为本的原则，在近世东亚三国的儒家知识分子那里得到了淋漓尽致的体现。儒教如同一颗璀璨的明珠，在近世东亚的上空绽放着绚丽夺目的光芒。

本书除序论及终章外，共分为六章。序论部分重点探讨本书的研究课题、明确研究目的、梳理先行研究，以及设定研究方法等。第一章主要阐述黄宗羲、朴趾源、横井小楠三人的生涯，论证选择此三人作为比较研究对象的具体理由。第二章分别从政治、经济、学术三个维度出发考察黄宗羲、朴趾源、横井小楠三人儒教思想的诞生背景及其形成原因。第三、四、五、六章则分别从“理气哲学观”、“世界观”、“经济观”、“人才观”入手，深入比较和探索黄宗羲、朴趾源、横井小楠三人在儒教理论、学说层面的共通性及差异性，进而在终章中高度凝练出近世东亚思想世界的主要特色以及共通课题，同时还原出儒教的真实面貌与核心特征，揭示出儒教在整个近世东亚社会中所发挥的关键作用以及巨大的历史意义。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

序論 …… 1
第一節　本書の研究課題 …… 1
第二節　先行研究及び本書の研究方法 …… 5
小結 …… 9

第一章　本書の研究対象及び選択理由 …… 11
第一節　三人の生い立ち …… 11
第二節　選択理由 …… 13

第二章　黄宗羲、朴趾源、横井小楠の儒教思想の誕生背景 …… 18
はじめに …… 18
第一節　明末清初における儒教思想の誕生背景 …… 18
一、政治的背景
二、経済的背景
三、学術的背景
第二節　朝鮮後期における儒教思想誕生の背景 …… 23
一、政治的背景
二、経済的背景
三、学術的背景
第三節　江戸後期における儒教思想の勃興の背景 …… 30
一、政治的背景
二、経済的背景
三、学術的背景
小結 …… 36

第三章　黄宗羲、朴趾源、横井小楠の理気哲学観 …… 38
はじめに …… 38

第一節　黄宗羲の理気観 …… 39
一、問題の所在
二、「天地に盈ちるのは皆気也」—生成論の構築
三、「盈天地皆心」—認識論の構築
四、「心無本体、工夫所至即本体」—四句教の統合
第二節　北学論者朴趾源の理気観とその周辺 …… 52
一、朝鮮における理気論争—退渓と栗谷
二、北学論者洪大容の理気哲学観
三、燕巌の人物性同論と気の認識
第三節　横井小楠の理気観 …… 67
一、熊澤蕃山の影響
二、事例からみる小楠の「時所位」的思考
三、小楠における「実理」
小結 …… 82

第四章　黄宗羲、朴趾源、横井小楠の世界観 …… 86
はじめに …… 86
第一節　横井小楠の「華夷」観 …… 88
一、横井小楠の『鎖国論』の読み方
二、「攘夷三策」の読み方
三、普遍的「道理」と「華夷」観
第二節　朴趾源の華夷観 …… 100
一、「天円地方」説の克服
二、洪大容の地円説の継承
三、清朝に対する認識
四、「北学」の真意
第三節　黄宗羲の「華夷」観 …… 114
一、伝統的「華夷」観の継承
二、伝統的華夷観の変容
三、「華夷」観の確立—適応と原則
小結 …… 125

第五章　黄宗羲、朴趾源、横井小楠の経済観 …… 126
はじめに …… 126

第一節　先秦儒教における経済理論 …… 126
第二節　黄宗羲の経済観 …… 132
一、君主の利益と民の利益
二、「黄宗羲定律」とは
三、「工商皆本」の内実と意義
第三節　朴趾源の経済観とその伝承 …… 141
一、商工業発展の構想
二、農業経済発展の提案
三、利用厚生思想の淵源
四、朴燕巌の経済観の伝承——朴斉家の商業観
第四節　横井小楠の経済観 …… 153
一、太宰春台の経済観
二、小楠における国内現状認識及び消費・生産論
三、小楠における世界情勢認識および流通交易論
小結 …… 165

第六章　黄宗羲、朴趾源、横井小楠の人間観 …… 170
はじめに …… 170
第一節　士についての歴史的考察—儒家を代表に …… 170
一、士の形成とその特徴
二、士の理想人格
三、士の発展及び士人意識
第二節　黄宗羲における士の構想 …… 177
一、科挙と人材選抜
二、学校と士
三、文人武将
第三節　横井小楠の「士道」観 …… 188
一、士に対する新たな規定
二、武人文心
三、学校と士
第四節　朴趾源の「原士」像 …… 195
一、朝鮮の士人像の歴史的考察
二、朴趾源における両班批判
三、燕巌の学問教育観(其の一)——読書のすすめ

四、燕巌の学問教育観（其の二）——「実用之学」のすすめ
五、人材登用論—「擬請疏通疏」を中心に
小結 …… 214

終章　近世東アジアの「思想主体」及び「思想世界」の特徴 …… 216

参考文献 …… 223
人名索引 …… 232
書名索引 …… 238
あとがき …… 242

序　論

第一節　本書の研究課題

現在の日本社会では、一部の専門家を除いて、儒教の社会的な効果を過去のものとしか捉えず、現代社会に有効な処方箋を与えるとは考えられていない。その主な理由について次の三点が挙げられる。

第一に、近代以降、日本は、西洋文明の強い影響を受けて、近代化への大きな第一歩を踏み出した。そのため、日本人が、東洋思想である儒教より、西洋的なものにより強い関心を向けていたことは決して想像できないことではない。その典型的な例として、まず福澤諭吉（1835－1901）の「腐儒の腐説を一掃してやろうと若い時から心掛けました」①という宣言を思い浮かべる。福澤は、旧制度とともに儒教的伝統を批判、唾棄し、それまでの儒者を「腐儒」と切り捨てた。彼の目に映った儒教にはさまざまな欠点がある。例えば、儒教は身分制・門閥制を重んじるものであるし、儒教支配の社会には自由論争の風潮が欠如している。また、儒教は「人間普通日用に近き実学」ではない。竿頭一本を進んで言うと、儒教に対する福澤の低い評価は彼のアジア蔑視観と表裏一体になっている。こうした認識は、後に「我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」という「脱亜論」の形で具現化されて、やがて近代日本の帝国主義と結びついた。その影響の広さと深さが他のアジア諸国をも否応なしに巻き込んだ形でとらえられ、現代まで「執拗低音」のように存続し続けている。「われわれ日本人が、ヨーロッパの中世や古代に関心をもつ場合、その関心の底部には、意識するとしないとにかかわらず、多かれ少なかれその人なりのヨーロッパ近現代像といったものが横にわたっている。裏返して言えば、日本人のヨーロッパ中世や古代に対する関心は、ヨーロッパ近現代像を触媒にし、あるいはそれに触発されている。……

① 『福澤全集』第7巻、「福翁自伝」、国民図書株式会社、1926年、502頁。

これに対して、中国の古典の場合、『史記』にせよ『唐詩』にせよ、それらへの関心は中国の近現代への知識や関心とはむしろ無関係に存在していることのほうが多い。この相違は、ヨーロッパの近現代像が、明治以来、他の世界に時には優越的とさえされたある文明価値をもつと認められてきたのに対し、中国の近現代が一般に文明価値どころか歴史価値そのものにおいて、ヨーロッパはもとより日本にすら劣っていると通念されてきたことと無縁ではない」①という認識は急所を突くものにほかならない。

第二に、近代以前の日本は、中国、朝鮮のような儒教官僚の支配する社会ではなく、武士の支配する社会であった。近代以前の中国も朝鮮も「試験地獄」②と呼ばれる科挙制度を導入して人材の選抜と登用を行ない、いわゆる「文治主義」を確立した。それゆえ、科挙試験こそが近代以前の中国人及び朝鮮人の立身出世の唯一の道である。苛烈な科挙(郷試、会試、殿試の三段階)より勝ち抜くには、幸運の眷顧と「四書五経」(合計43万余字)に対する並々ならぬ記憶力と応用力が不可欠である。しかも、中国にせよ朝鮮にせよ、いずれも近代初期まで科挙制度がしぶとく生き続けてきた。一方、日本の場合、平安時代を除いて、たとえ儒教が官学の地位に上り詰めた江戸時代でも科挙制度の定着する基盤が形成されていなかった。儒教で運命を変える中国と朝鮮の文人と比べて、世襲制の下の武士階級は、儒教を立身出世の手段とみなさず、一種の趣味または教養として扱った。日本では、儒者は必ずしも高い地位、膨大な富を獲得できるとは限らず、むしろ逆に「医者は富まし、儒者は寒し」に示されるように、儒学者は往々として私塾を開き、微々たる学費で生計を立てるしか仕方がなかった。また、伊藤仁斎の「古学」、荻生徂徠の「古文辞学」、さらに本居宣長の「国学」の影響で、支配階級である武士は多様な学問を積極的かつ容易に取り入れることができた。まさに渡辺浩の指摘したように、「学者とは、儒者達が嘆き続けたように、いわば一芸の師匠」③であった。言い換えれば、儒教はあくまで様々な「芸」の中の一つに過ぎず、従って、儒教の歴史的存在意義は、日本では中国、朝鮮に比べてはるかに小さかった。

第三に、儒教はあくまでも中国で生まれたもので、日本社会の固有の

---

① 溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会、1989年、131頁。
② 宮崎市定『科挙　中国の試験地獄』、中公文庫、1984年。
③ 渡辺浩『東アジアの王権と思想』、東京大学出版会、1997年、126頁。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ものではない、という「心理的トラウマ」による点である。突き詰めていうと、堯、舜、禹、湯、文王、武王、周公、孔子、孟子などの人物は、あくまで中華民族の精神的精髄にすぎない。そのため、これらの人物の思想や事跡を研究することは、隣国中国の民族意識の高揚のみに役に立ち、今日の大和民族のアイデンティティーの再建と復活にむしろ背を向けると言ってもよい。過去も現在も、日本社会では必ず何か土着的なものが存在し、日本人の思考様式を方向付けている。このような「土着的なもの」を探り出し、それを謳歌する作業こそ、大和民族の心情に適合し、日本の復興のために奉仕すべきものと見做される。それゆえ、外来者、または侵入者としての儒教によって日本社会の特徴を描き出すことや日本民族の魂を鋳造することにはたいした意味がない、というナショナリズム的考えが顕在的にも潜在的にも、人々の発想の中に根付いているのである。

もちろん、私は日本文化の固有性(日本的なもの)を否定しようとするという意図は毛頭ない。ただし、丸山真男の指摘した通り、日本思想史を考える時に、外来文化の圧倒的な影響と、執拗に残存する「古層」との矛盾と統一を総合的に分析しなければならないのも事実である。それ故、外部侵入者としての儒教を看過すれば、日本思想史の全体を捉えられなくなることは言うまでもない。「儒学の『始まり』は中国にあったにしても、それが東アジアの各地域に広がったことから推測すれば、ある時期の東アジア各地に共有されるような命題が提示されていたと考えるべきであり、儒学が中国人に慣れ親しまれる存在となるには、日本で起きた現象と共通する過程があったと想定できるのではないかということである」①という澤井啓一の指摘が的を射ているのも、そのような理由によるのである。

19世紀中頃、西洋列強は圧倒的な軍事力と経済力を以って東アジア地域②に侵入してきた。否応なしに国際社会に吸い込まれた東アジアの一

---

① 澤井啓一『「記号」としての儒学』、光芒社、2000年、12頁。

② 「東アジア」という言い方そのものはアジア人自身(内部)が創出した名称ではなく、ヨーロッパ人(外部)から与えられる空間名詞だとされている。また、時代の変遷によって「東アジア」という言葉の意味の内包と外延も絶えず変化している点も見逃してはならない。それゆえ、「東アジア」という概念を論ずる時に、「政治概念としての東アジア」、「文化概念としての東アジア」といった視座も存在している。一方、「東アジア」を地理空間概念として捉えた場合、その地域の範囲は、非常に曖昧で、境界線を引くことは決して容易なことではない。というのは、広義的な「東アジア」を分析する場合は、東北及び東南アジアのみならず、太平洋にまで及んでいるからである。また、『広辞苑』には、「東アジアとはアジアの東部。日本、朝鮮、中国を含む地域。東亜」と表記しているが、モンゴルの存在について明言されていない。本書は「東アジア」という用語の発生背景と時代的性格(例えば、アジア主義論や近代の超克論など)を論ずるものではない。また、広義的「東アジア」という概念を捉えず、「東アジア」を中国、日本、韓国の三国に限定し、比較文化史・思想史の角度から議論を展開していることをあらかじめ断っておきたい。

部の知識人は、西洋をモデルとして近代化の道のりを辿りはじめた。そうした風潮の中で、人々は儒教を旧体制と運命を共にする思想と見做し、決別した。これによって、儒教は、少なくとも、それまでの学問の中心、知識のより所としての地位を明け渡したのである。しかし、近代的学問・思想の形成を儒教をはじめとする「封建」思想の克服の対象として捉えるのはある種の「進歩史観」に基づく態度であり、図式としては分かりやすいが、単純化に陥る危険性がある。近代以前の儒者は果たして腐儒であったのか。儒教には自由論争の気風や主張がまったくなかったのか。徐復観は次のような仮説を打ち出した。

専制統治によって歪められる以前の本来の儒教は、民主・自由と近く、ただそれを制度で実現することまでに至らず、「聖君賢相」に託してしまったのだ。それ故、孔孟が当今に生まれ変わるならば、必ず「民主自由」の教えを唱導するのであろう。①

徐復観の説は検討するに値する価値がある。儒教は果たして「封建」思想の残滓であろうか。仮にそうでなければ、専制統治に組み込まれる以前の本来の儒教のあり方は何であろうか。

近年、東アジア地域の高度経済発展の背景には、儒教という文化的同一性に求めることができるのではないかという見方が現れ、儒教が再評価されはじめた。この見解の是非を論じることは本書の趣旨ではないが、少なくとも、第一は、このことによって儒教の研究に多様な視点を提供した。すなわち、単なる文献的、哲学的な研究から生活史、社会史的な研究へと転換した。第二は、西欧中心史観または単線的発展段階説的色合いを帯びた従来の歴史観の妥当性を再検討させるきっかけを提供したことである。第三は、アジア諸国の内部(内発)から、自己と他者との普遍性及び特殊性が重要な課題として提起され活発な議論が生じた。

本書は、思想史の視点から「東アジア共同体」の創成に向ける取り組みの一つである。具体的に言うと、従来のナショナリズムの風潮のもとで「タコツボ型」に陥ってしまっていた儒教研究、すなわち、「中国の儒教」、「日本の儒教」、「韓国の儒教」といった個々の儒教研究を「東アジア」という一つの纏まった「思想世界」に位置づけて捉え、それを基に思想史的視点からアプローチし、東アジアにおける儒教の歴史的意義及び儒教の果たした役割を問い直す。そして、東アジア内部における思想の基軸、連鎖、交錯、さらに相互投影の実像をより一層浮き彫りにしようと試みる。

---

① 徐復観『儒家政治思想與民主自由人権』、学生書局、1988年、190－191頁。

第二節　先行研究及び本書の研究方法

2009年10月13日、佐々木毅は韓国の忠北大学で「公共哲学と大学教育」というテーマで講演を行った。①佐々木によれば、現在の日本の大学では専門知が細分化されすぎて、専門が違う者同士のコミュニケーションが取りにくくなってきたという。換言すれば、現在の学問は丸山真男が嘗て批判した「タコツボ型」になってしまった。このような学問体制を「ササラ型」に変えるためには、公共哲学の考えが必要なのである。山脇直司も指摘しているように、公共哲学はタコツボ的学問体制を打破するための起爆力である。なぜなら、「公共性」が、社会や人間をめぐって思索するあらゆる学問に不可欠の「学問横断的」な概念であることを訴え、学際的な共通の争点を作り出すことを試みているからである。また、公共哲学は、知識そのものが公共性を持たなければならないと主張することによって、知識が特定の専門家集団によってタコツボ的に私物化されることを徹底的に批判するからである。②

山脇の話は啓発的である。この点では、従来の儒教思想研究は、主に学問の受容史、学派史、または訓詁学の中の一分野のみに焦点を当てて展開され、また、東アジアの中の二国の儒教的思想家を分析対象としてその思想上の異同を追求してきた。したがって、東アジア儒教を一つの統合的な「思想世界」として捉え、儒教に含まれる広範な領域(哲学、政治、人間、道徳、経済、文学)を対象として同時に考察し、比較する研究の地盤は、依然として緩く、補強する必要が差し迫っている。

とはいえ、島田虔次は早くも20世紀60年代の段階で、「儒教史、朱子学史というものも中国、朝鮮、日本を通じての通史として、まず書かるべきである」③と提示し、東アジアの中の儒教という視座の樹立を呼びかけた。残念なことに、その響きは殆ど聞こえなかった。1995年頃になると、一部の日本の研究者は徐々に東アジアという開かれた空間で儒教を検討する可能性と必要性を意識し、一連の作業を行なった。その代表的な成果を挙げてみよう。

---

① 佐々木毅「公共哲学と大学教育—新しい公共性のありかたを問う」、『公共的良識人』第219号、2010年2月1日、1面。

② 山脇直司『公共哲学とは何か』、ちくま新書、2004年、32－33頁。

③ 島田虔次『朱子学と陽明学』、岩波新書、1967年、198頁。

まず注目すべきものは、溝口雄三、浜下武志、平石直昭、宮嶋博史が編集したシリーズ『アジアから考える』である。そのシリーズは全七巻からなっているが、必ずしも一つの主題から出発して各巻を構成しているわけではない。むしろ思想史学、社会史学、歴史学、政治学、文化人類学にわたる多分野の研究者が執筆に参与し、「日本におけるアジア認識の歴史的展開に注目しつつ、日本およびアジアそしてその双方にかかわる多くの主題について、関心の所在、分析や理解の枠組を問題史的に検討した」①とされている。例えば、シリーズの第一巻に伊藤亜人の論文「東アジアの社会と儒教」が掲載されている。伊藤は「中華の大伝統のなかで儒教はしばしば東アジアの社会を特徴付けるものとなされてきたが、その受容と土着化の過程で大きな差が見られた。しかしその実態を検討することもないままに、東アジアの社会はみな等しく『儒教社会』であるかのように一括して論じられるすらある」②と厳しく指摘し、さらに民族誌的な角度から韓国の農村社会の事例を取り上げ、韓国に及ぼした儒教の伝統、特に儀礼の影響を描いた。もちろん、『アジアから考える』というシリーズの創刊の主要目的は、刊行の辞に示されているように、アジアの文脈の中に、日本を位置づける試みを通して、日本の自己認識が、アジアとのかかわりの中で、どのような歴史的展示を示したかを吟味したいというものである。換言すれば、日本的イデオロギーの再確認と再創出はそのシリーズの重要な課題といえる。とはいえ、東アジア儒教を研究する際、このシリーズの存在を決して等閑視してはならないものである。

また、昨年(2014年)の日本の学界ではもう一つの力作が世に問われることになった。それは小島毅監修の『東アジア海域に漕ぎだす』(全六巻)というシリーズである。このシリーズを創刊する目的と意義について、小島は「東アジアでの緊密な関係が日常的な経済的、文化的な交流からますます期待される一方、そのためには更なる相互理解が差し迫った課題として眼前にある。そうしたよりよき関係の構築には、過去を振り返り、日本列島が中国大陸、朝鮮半島とともに織りなす海域世界がどのような歴史を歩み、その結果として今日の日本文化がいかに形成されてき

① 溝口雄三、浜下武志、平石直昭、宮嶋博史『アジアから考える(1):交錯するアジア』、東京大学出版会、1993年、「刊行に当たって」部分を参照せよ。

② 伊藤亜人「東アジアの社会と儒教」、溝口雄三、浜下武志、平石直昭、宮嶋博史『アジアから考える(1):交錯するアジア』、東京大学出版会、1993年、53頁。

たかを知る必要があろう」①と述べた。そのシリーズの第五巻は「訓読から見直す東アジア」という標題が付けられている。その内容を一言でまとめると、訓読を切口にして、思想、宗教、文化から東アジアの知的世界を浮き彫りにしたものである。本シリーズもまさに東アジア儒教を整合的に研究するための好材料である。

そのほか、法政大学の王敏の「東アジア」研究には異色の光彩が輝いている。王敏は近年東アジア中国、日本、韓国の差異への指摘のみが強調される傾向の中で、歴史文化や生活の視点から東アジアを見直し、往々として見逃されがちな中日韓三国の歴史文化および生活体系における共有制と接点に目を向けて、東アジアの共生の基盤を形成しようと尽力してきた。特に、王敏をはじめとする研究メンバーの共同研究を通して、三代聖人の一人として知られる禹王の遺跡およびその精神的伝承が日本と韓国で数多く発見された。 実は、儒教的知識人にとって、理想社会とは、堯、舜、禹、湯、文、武、周公が統治した社会、いわゆる「三代の治」と称される社会を指す。したがって、これらの聖人が制作した王道政治、禅譲制度、礼楽作法などの伝統は、後世の儒学知識人に利用され、現実政治の是非や社会秩序の良否を判断するバロメーターとなっていた。それゆえ、「唐虞三代」への再確認は東アジア儒教を再考する際の極めて核心的なファクターの一つであろう。

最後に、「東アジア儒教」研究を論ずる時に、台湾大学の黄俊傑教授の研究を避けては通れない。黄俊傑は「東アジア儒教」研究を大きく推進・発展させた重要な人物の一人である。彼は「東アジア儒教」を一つの体系的・統合的な学術領域(suigeneris)と設定した具体的な理由を「発展的連続性」と「構造的整合性」②に帰結している。より詳細にいうと、東アジアの中日韓三国は相互に無縁的な存在ではなく、長い間積極的に人文的な交流が行われてきた。こうした状況の中で、中国で生まれた儒教の思想及び学説は日本と韓国に移入される時に、そのまま受容されたり、あるいは日本化・韓国化した形で発展したりした。このような繰り返しの文化接触の過程で、儒教のある種の特質が連続的に継承されてきた。また、書物の流通により、東アジア各地の儒教的知識人は皆同じ儒家経典、即ち『大学』、『論語』、『孟子』、『中庸』の四書と『詩経』、『書経』、『易経』、『礼

---

① 小島毅監修『東アジア海域に漕ぎだす』、東京大学出版会、2014年、「刊行にあたって」を参考せよ。

② 黄俊傑「東アジア儒学は如何に可能か」、『山東大学学報』、2005年第6期。

記』、『春秋』の五経を読み、その註解を補ったり再解釈を行ったりした。もちろん、個々の儒教的知識人においては、当時の時勢、状況に応じて、どの経典を重要視するか、またどのように解釈するかについて統一な意見は形成されていなかったが、儒教の経典の範囲および仁、義、礼、智、信など基本的な儒教概念を共有していることは紛れもない事実である。それゆえ、東アジアの儒教的知識人は思想構造にもある種の「整合性」を共有していたのである。

黄俊傑らの研究グループの一連の研究成果①に刺激されて、日本では「東アジア儒教」に繋がる研究が相次いで誕生した。例えば、「『論語』はいかによまれてきたか」(『月刊しにか』、大修館書店、2001第2期)、「東アジアの儒教と近代の「知」」(『季刊日本思想史』、ぺりかん社、2004)「東アジアの四書学」(『季刊日本思想史』ぺりかん社、2007)など。

「東アジア儒教」をめぐる研究の急速な進展は本書の執筆に少なからぬ影響を及ぼしている。実は、上述の一連の先行研究に問題点がないわけではない。最も目立った問題点について言えば、「東アジア儒教」と題されながら、その中身である中日韓三国の儒教をめぐる議論は非常にアンバランスで、特に韓国儒学に関する論述は緒に就いたばかりというイメージがあって、議論の広さも深さも今後更なる進展が期待されている。そこで、本書において、「東アジア儒教」という視座のもとで、中国・韓国・日本の儒教的知識人である黄宗羲(1610－1695)、朴趾源(1737－1805)、横井小楠(1809－1869)の三人を同時に取り上げ、「哲学観」、「世界観」、「社会観」、「人材観」の四側面に焦点を絞ってバランスをとった形で三人の比較研究を行った。彼らが、先行する学問の概念・理論をいかに理解・受容したかを考察するとともに、彼らが自らの理論や概念を通していかなる内容を世間に伝えようとしたのか、という点にも注目した。

そして、黄宗羲、朴趾源、横井小楠は、それぞれ異なる時代と地域で生涯を送った人物であるにもかかわらず、倫理哲学、学問教育、社会政策などの諸領域で数多くの類似する主張を残した。直接の対話のないこの三人が、なぜそのような類似する主張をなしたのか。その背後には、

① 中国の台湾大学の東アジア文明研究センターは2004年より続々と『東アジア文明研究叢書』を計画し、今日まで合計97冊が公刊した。その中で、「東アジア儒学」というテーマに関わる著作の数は約4分の1を占めている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com